大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金　報告書
Outcome report

計画名 Plan	幼少期の逆境経験と教育の健康への影響 － 英国への研究滞在
氏名 Name	鬼塚 浩明
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	医学研究科 社会健康医学系専攻 専門職課程 2 年
渡航国 Country	イギリス・ロンドン
渡航日程 Travel schedule	2024 年　11 月　4 日　　～　　2024 年　12 月　20 日

・ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
・写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
・各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
・日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本渡航の目的は、University College London (UCL) に滞在し、McMunn 教授、Kelly 教授らのグループにて、専門職課程における課題研究の研究計画のブラッシュアップおよび研究手法の習得、行政データの活用経験が豊富な専門家とのネットワーキングを行うことであった。2024 年 11 月 4 日-12 月 20 日に University College London Department of Epidemiology & Health Care に滞在した。自身の課題研究を進めるとともに UK Millennium Cohort のデータを用いて、幼少期の逆境経験の中でも特に貧困に焦点を当てて研究を進めた。また、大学院で開講されている授業を聴講したり、セミナーで発表したりなど、当初予定にはなかった貴重な機会にも恵まれ有意義な滞在になった。

UCL Main Campus

大学院での授業

成果 Outcome

本渡航によって到達すべき目標として挙げていた3つの目標について概ね達成することができた。

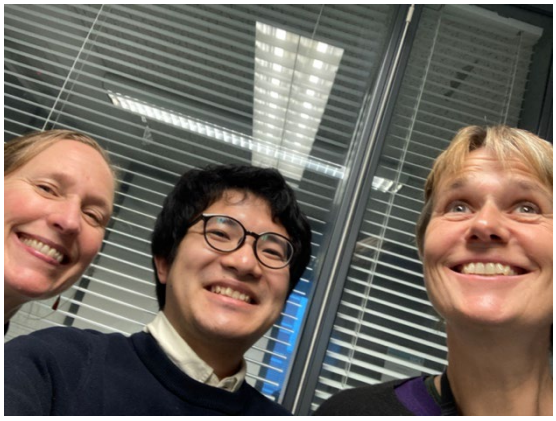
(1) 課題研究の研究計画のブラッシュアップ

1 ヶ月半の滞在中で 6 回（おおよそ週に 1 回のペースで）研究についてのミーティングを行った。ミーティングでは、課題研究の大枠と分析にかかわるテクニカルな点についてアドバイスをいただくとともに、今回の課題研究がこれまでの研究や国際的な研究の流れにおいてどのように位置づけられるかアドバイスをいただけた。

(2) 大規模データを用いた研究手法の習得
2000 年から 2002 年に英国で生まれた子どものうち、およそ 18,000 人を追跡調査している UK Millennium Cohort Study のデータを用い、貧困と幼児教育の肥満への影響を分析するテーマを提案した。研究を組み立てるにあたって、大規模データの取り扱いや研究手法を学んだ。およそ 1 ヶ月半という限られた滞在であったが、データの整理や分析を通じてデータベース構造への理解とともに、他のチームがどのように研究を組み立てているのかを知るいい機会になった。また、研究手法の習得として因果媒介分析に関する集中レクチャーに参加することができた。本渡航で得たものをアウトプットしていくために、引き続きプロジェクトに取り組んでいきたいと考えている。

(3) 専門家とのネットワーキング
International Centre for Lifecourse Studies (ICLS)で開催されているセミナーでの自身の研究に関する発表を行い、フィードバックを得た。渡航者が所属した International Centre For Lifecourse Studies は今年秋に Economic and Social Research Council（ESRC）より大型グラントを獲得し、より健康格差の改善に重きをおいた ESRC Center for Lifecourse Health Equity (EQUALISE) の立ち上げが始まっていた。今後 5 年間で健康格差の改善のためのエビデンスを創出するためにチームビルディングが進んでおり、今後も関係を継続することで最新のトピックにキャッチアップできるようにしたいと考えている。その他にも、PhD1-2 年目の学生が PhD Candidate になるための審査会（Upgrade）を見学したり、部門でのクリスマスパーティーに参加したりなど、PhD の学生や若手の研究者との交流も深めることができた。

ICLS での発表


ご指導くださった先生

今後の展望 Prospects for the future
本渡航を通して、自身の課題研究をブラッシュアップするとともに、UK Millennium Cohort のデータを用いて研究を組み立てる経験を得ることができた。セミナーでの発表や大学院の授業を経験することで、英語でディスカッションすることへの抵抗が少なくなった。また、自身の課題研究を国際的な研究の流れに位置づけられたことは大きな収穫であった。本渡航によって蒔いた研究アイデアを形にできるように研究を進めていきたい。実際に渡航することで得られた研究者とのつながりを大切に、研究ネットワークを広げていきたい。

末筆ながら、本海外渡航をご支援いただいた京都大学大学院教育支援機構（DoGS）の皆様に心より感謝申し上げます。